

太陽の娘 ジョージア

この世に何もなかったような遠い昔のこと。三人の兄弟がいました。

三人は、耕すには三日かかるほどの広い野原を切り拓いて畑にしました。そして、ひとりはこちらの畑に種をまき、ひとりはこちらの畑に種をまき、末の弟は、まんなかの畑に種をまきました。

畑は一面に芽を吹いて、麦が育って、穂が波のように風にゆれました。ところが、あるとき、真黒な空からひょうが降ってきました。両側の畑は助かりましたが、まんなかの畑は、麦が一面、めちやめちやに地面に打ちつけられてしまいました。

弟は、ため息をつき、鎌だけを手に持って、幸せを探しに旅に出ました。

やがて、金持ちの所にやって来ました。耕すには百日もかかるほどの畑がありました。

若者は、金持ちにいいました。

「この畑の作物を一日で刈ったら、何をくれますか」

「収穫の半分をあげよう」

若者は、まず、作物の束をくくるための縄をないました。昼になると、畑に出かけて行って、鎌を手に、刈っては束ね、刈っては束ね、刈っては束ねていきました。太陽が沈み始めたとき、くくっていない束が一束だけ残りました。若者は立ち上がって、帽子をぬいで太陽に向かったのを見ました。

「沈まないでください。ほんのちよつと待ってください。あと一束くくる時間をください」

太陽は、若者の祈りを聞き入れないで、沈んでしまいました。

若者が最後の一束をくくり終えたとき、金持ちがやって来ました。金持ちは、作物がぜんぶ刈り取られているのを見て、おどろいていいました。

「よし。約束どおり、収穫の半分を取るといい」

若者は、

「いいえ。この最後の一束は、太陽が沈んでからくくったものなんです。わたしは約束を果たすことができませんでした。だから、この幸せは、わたしのものではありません。あなたのものはあなたのもの。わたしのものはわたしのもの。いっしょにはできません」といって、立ち去りました。

若者は、幸せを探してどんどん歩いて行きました。やがて、ある王さまの所にやって来ました。若者は、そこで羊飼ひつじかいとして働くことになりました。王さまはいいました。「四年のあいだ、一頭の羊もおおかみに取られず、病気にもやられないで世話ができたら、羊の群れの半分をおまえにやろう。もしできなかったら、手ぶらで立ち去らねばならない」

若者は承知して、羊を追って牧場まきばに行きました。

若者は、四年のあいだ、一頭の羊も欠けることなく世話をしました。ちょうど四年が終わる日に、若者は、羊の群れを王さまのもとに追い立てて行きました。とつぜん、おおかみが飛び出して来て、羊を一頭つかまえて森の中へ引きずって行ってしまいました。お城に着くと、王さまは、羊たちがみごとに育って太っているのを見て、大喜びしました。

「よし。約束どおり、羊の群れの半分を取るとよい」

「いいえ。先ほど、おおかみのやつに一頭盗まれてしまいました。わたしは約束を果たすことができませんでした。わたしは幸せを手に入れるわけにはいきません」といって、立ち去りました。

若者は、どんどん歩いて行きました。どれほど歩いたでしょうか、やがて、ある川のほとりにやって来ました。腰を下ろして休んでいると、空から太陽の娘が三人舞い降りて来て、川で水浴びを始めました。その美しいことといったら、それより美しいものなど目にすることはできないと思われるほどでした。

若者は、娘たちのほうへこっそり近寄っていきました。そして、ひとりの娘をつかまえて、さっと走りだしました。走って走って、ある野原にたどり着くと、そこに小屋を建てていっしょに暮らしはじめました。ふたりはたいそう貧しかったのですが、若者は、働きに出ようとしませんでした。

「どこへ行って何をして、幸せなんぞ手に入るもんか。働くなんてむだなことだ」というばかりでした。すると、太陽の娘が、若者に指輪ゆびわを渡していいました。

「この指輪を地面に置くと、食べ物と飲み物が現れ、指輪をしまうと、全て片付けられます。これだけが、わたしたちの財産です」

若者は喜んで、ふたりは気楽に暮らしはじめました。

あるとき、若者は、自分たちの小屋に皇帝こうていを招いてごちそうしようといいました。

妻は、
つま

「皇帝をお客に招くなんて、とんでもない。きっと悪いことが起こります」といいました。

「いいや。この世にはわたしのような貧しい者も暮らしていて、それでも皇帝を招くことができるんだと知ってもらいたいんだ」

若者はそういつて、宮殿に出かけて行きました。

皇帝は若者の話を聞くと、ばかにして、しばらく笑いころげていましたが、

「わしは、おまえの所へなんぞ行かん。が、望みとあらば、大臣どもをつかわそう」といいました。

大臣たちは、若者の家に向かいました。とちゅうでお腹が空いたので、きじを撃つて、召使いに焼くように命じました。召使いは、そまつな小屋を見つけて入っていつて、きじを焼き始めました。そこへ太陽の娘が入って来ました。召使いは、そのあまりの美しさに目を離すことができず、自分がなぜここにいるのか、何をしているのかさえ分からなくなってしまうました。きじは、炭のように黒こげになってしまいました。ようやく我に返った召使いは、黒こげのきじを持って大臣たちのもとに帰りました。

「なんだつておまえは、きじをこんなにこがしたんだ」と、大臣たちはしかりつけました。召使いは、

「あそこの小屋に、女がひとりいたのです。あまりの美しさに、わたしは、自分がなぜここにいるのか、何をしているのかさえ分からなくなってしまうました。それで、きじを焼きこがしてしまったのです」と答えました。

大臣たちはそれを聞くと、その女を一目見ようと、大急ぎで馬にまたがってかけだしました。

小屋では、若者が待つていました。若者は、指輪を地面に置きました。すると、テーブルが現れ、その上に、ごちそうが次から次へと並びました。大臣たちは、おいに食べたり飲んだりしました。けれども、ちゃんとした家もなければ召使いいいないのに、どこからこのごちそうが出てくるのかと、驚きあやしみました。そのとき、太陽の娘が現れました。大臣たちは、もう何が何だか分からなくなつてしまいました。

大臣たちは宮殿に帰ると、皇帝に、家もなければ召使いいいないのに、すばらしいごちそうが出たこと、若者の妻が見たこともないほど美しかったことを話しました。そし

て、

「あの女は、あなたさまにこそふさわしい妻でしょう」といいました。皇帝は、「いったいどうしたら、その女を奪い取ることができるだろうか」とききました。

「あの若者を呼び出して、太陽にあるという金の羊の皮を持って来るようにお命じなさいませ。きつと帰って来られないでしょう。そうすれば、あいつの妻はあなたさまのものになります」

ただちに皇帝は、若者を呼び出していいました。

「太陽にあるという金の羊の皮を持って来るのだ」

若者は、悲しみにしずんで、帰って来て、妻にいいました。

「皇帝が、金の羊の皮を持って来るようにというんだ」

「いまさら、何を嘆いているのです。こうなることは、初めから分かっていたことです。さあ、立ち上がって出発するのですよ」

若者は、出発しました。長いこと歩いてたくさんの国をめぐり、歩きに歩いて、太陽と月が住む所にやって来ました。

太陽は、世の中を照らすために出かけていて、家には、月だけがいました。月は、若者が娘の夫だと知ると、大喜びしました。そして、

「まもなく太陽が帰って来る。おまえさんは、焼けこげてしまいうだろう」といって、若者を針はりに変えて、柱に差しこんでおきました。

夕方、太陽が帰ってきました。

「人間のおいがするぞ」と、太陽はいいました。

「何をいうんです。あんたが世の中をめぐって、人間のおいを運んできたんでしょ」と、月はいいました。

しばらくして、月がいました。

「もし、ここに、わたしたちの娘の夫が来たとしても、焼き殺してしまわないでしょうね」

「いや、いや、そんなことはしやしない」

太陽がそう誓ったので、月は、針を人間のすがたにもどして、太陽の前に立たせました。太陽は、娘の夫を喜んで迎えました。

「ところで、おまえは、なぜここにやって来たのかね」と、太陽はたずねました。

「皇帝が、あなたの金の羊の皮を取って来なければ、わたしから妻を取り上げてしまうというのです」と、若者がいうと、太陽は、

「心配することはない。だが、しばらくわしの庭で休んでいなさい」といって、若者を庭に連れて行きました。そこは、四季の庭で、芽を吹いたばかりの木もあれば、花盛りの木もあり、実をたわわに実らせた木も、葉を散らしている木もありました。若者は、うつとりと庭をめぐり歩きました。

太陽は、

「まもなく、おおかみと雷神イリヤらいじんが食事を用意してくれるだろう」といって、どこかへ行ってしまうした。

しばらくすると、おおかみがテーブルを持ってやって来て、雷神イリヤが食べ物と飲み物をならべました。

若者は、おおかみを側そばにより寄せていいました。

「わすれはしまいな。わたしが四年のあいだ羊の世話をして、羊の耳ひとつ失わなかったのに、羊を分けるちようどその日になって、とつぜんおまえがとび出して来て、羊をぬすんで行ったのを。なぜ、あんなことをしたんだ」

いうないなや、若者は、おおかみをこん棒でなぐって、なぐりつけました。

それから今度は、雷神イリヤを呼びよせていいました。

「わすれはしまいな。わたしがふたつの畑の間に畑を持っていて、麦が芽を出し実ったのに、おまえがひょうをふらせて、実をみんな地面に打ちつけてしまったのを。なぜ、あんなことをしたんだ」

いうやいなや、若者は、雷神イリヤをこん棒でなぐって、なぐりつけました。

おおかみと雷神イリヤは、太陽の所に走って逃げました。太陽がやって来て、

「どうしておまえはこのような仕打ちをしたんだ」といいました。若者は、

「わたしは、畑を持っていました。それをみんな、雷神イリヤがひょうをふらせて、めちゃめちゃにしたのです。それから、わたしは四年のあいだ、羊飼いとして働きました。最後の日に、おおかみがやって来て、わたしの仕事をすべてだいなしにしてしまったのです」と答えました。そして、「わたしは、耕すのに百日はかかる広い畑を一日で刈り取り、束ねてしまいました。ただ一束だけがくくられずに残っただけなのに、わたしがいかにお願いしようと、あなたは、しずんでしまわれました。わたしの努力をすべてむだ

にしてしまわれましたね」といいました。これを聞くと、太陽はどう答えてよいか分からず、だまつて金の羊の皮を若者に渡しました。

若者は、金の羊の皮を持って帰り、皇帝に渡しました。けれども、皇帝は、太陽の娘をあきらめることができず、こういいました。

「あの世へ行つて、わしの死んだ母親の指輪を取つて来るのだ」

若者は、悲しみにしずんで、帰つて来て、妻にいいました。

「皇帝が、今度はあの世へ行つて、皇帝の母親の指輪を取つて来るようにというんだ」「いまさら、何を嘆いているのです。こうなることは、初めから分かっていたことです。さあ、立ち上がつて出発するのですよ。このりんごを転がしてそのあとについて行きなさい」

妻は、そういつて、若者にりんごをひとつくれました。

若者は、出発しました。りんごはころころ転がって、森の中の草地に転がり出しました。そこに、しかが、大きなつのをささえて立っていました。

「どこへ行くんだい」と、しかはききました。

「あの世へ、皇帝の母親の指輪を取りに行くところだ」

「じゃあ、ぼくに何か薬をもらつて来てくれないか。この大きなつのが重くてしかたがないんだ」

「いいよ」

若者は、承知して、旅を続けました。

やがて、切り立ったがけの所までやつて来ると、雄牛が一頭、鎖につながれて立っていました。まわりには水も草もないのに、雄牛は丸々と太っていました。雄牛は、

「どこへ行くんだい」とききました。若者は、

「あの世へ、皇帝の母親の指輪を取りに行くところだ。ところで、そばに食べ物も飲み物もないのに、なんだつておまえはそんなに太っているんだい」とたずねました。雄牛は、

「おれは、あつちへ行くやつはたくさん見て来たが、もどつてきたやつはひとりも見たことがない。だが、もどつて来られたら、答えてやるさ」といいました。

若者は旅を続けました。やがて、美しい草原そうげんに出ました。みずみずしい草が海のように波立ち、小川がさらさらと流れていました。その草原の真ん中に、雄牛が一頭、鎖に

つながれて立っていました。その雄牛のやせていることといったら、ひとかけらの肉も付いていないほどでした。若者は、

「まわりに、こんなにもたくさん食べ物や飲み物があるというのに、なんだっておまえは、そんなにやせているんだい」とききました。雄牛は、

「おれは、あっちへ行くやつはたくさん見て来たが、もどってきたやつはひとりも見たことがない。だが、もどって来られたら、答えてやるさ」といいました。

若者は、さらに旅を続けました。すると、一本のおのの柄えに、一組の夫婦が横たわっている所に来ました。若者はおどろいて、

「あんたたちは、どうして、ふたりで一本のおのの柄の上に寝ているんだい」とききました。

「わたしたちは、あっちへ行く人はたくさん見て来たが、もどってきた人はひとりも見ることがない。でも、もどって来られたら、答えてあげましょう」

若者は、夫婦のそばを通り過ぎて、先へ進みました。すると、大きな水牛の皮の上で、一組の夫婦が横になって押し合っていました。ふたりは、

「もつとあっちに寄って場所を空けて」と、ののしりあっていました。

「そんな大きな水牛の皮の上に寝ているのに、どうして、押し合っているんだい」

「わたしたちは、あっちへ行く人はたくさん見て来たが、もどってきた人はひとりも見ることがない。でも、もどって来られたら、答えてあげましょう」

若者は、夫婦のそばを通り過ぎて、先へ進みました。深いがけの所に来ると、ひとりの男が、がけの上で橋になって横たわっていました。その上を、みんなが歩いて渡っています。

「なんだってあんたは、こんな所で橋になってるんだい」

「おれは、あっちへ行く人はたくさん見て来たが、もどってきた人はひとりも見ることがない。でも、もどって来られたら、答えてやろう」と、橋人間はいいました。

若者は、りんごのあとについて、さらに先へと進みました。そして、とうとう、皇帝の母親の所にたどり着きました。

「あなたの息子が、あなたの指輪を取って来るようにと、わたしに命じました」と、若者はいいました。皇帝の母親は、指輪をさし出していました。

「これを、息子に渡して、こう伝えておくれ。『おまえは、あの世でもわたしの心をかき

乱すのだね。その罪で、お前はのろわれるだろう。おまえの大臣たちが、お前を食いつくしてしまうように』とね」

若者は、

「分かりました。ところで、あなたにお尋ねしたいことがあります。ここに来る途中で、一頭のしかが、大きな角をささえて苦しんでいました。どうしたら、助けてやることができるでしょう」といいました。皇帝の母親は、

「その鹿に、五月の水を飲ませて、楽にしておあげなさい」といしました。若者は、お礼をいって、出発しました。

やがて、橋人間の所までもどつてきました。橋人間はいいました。

「おれは、生きているとき、橋の番人だった。金を払わないやつは、だれもその橋を渡らせてやらなかった。情け容赦なく、金をまきあげた。それで今、こんなふうに苦しんでいるのだ」

若者は、また歩いて行きました。すると、水牛の皮の上に寝ている夫婦の所にやって来ました。夫婦はいいました。

「わたしたちは、生きているとき、愛しあっていなかったから、世界はとても狭苦せまぐるしかった。それで今も、こんなふうに苦しんでいるのです」

ふたりのそばを通り過ぎて歩いて行くと、おのの柄の上に寝ている夫婦の所にやって来ました。夫婦はいいました。

「わたしたちは、生きているとき、深く愛しあっていたから、どんな所でもうまく暮らしていました。それで今も、こんなふうに居心地がいいのです」

やがて、若者は、美しい草原にやって来ました。やせた雄牛がいました。

「おれは、わがままで、主人によく仕えなかった。それで今、こんなふうに苦しんでいるのさ」

やがて、切り立ったがけにやって来ました。太った雄牛がいました。

「おれは、主人に誠実に仕えて、主人もおれによくしてくれた。それで今、ここは食うものはないが、それでも満足して太っているのさ」

若者は、大きなつのをささえているしかの所までやって来ました。若者は、

「五月の水を飲めば、楽になるだろうよ」と教えてやりました。しかが五月の水を飲むと、たちまちつのが抜け落ちました。

とうとう、若者は、皇帝の所にもどりました。皇帝は、指輪を受け取ると同時に、母親の呪いのろも受け取りました。たちまち皇帝はうさぎになり、大臣たちはおおかみになりました。あつというまに、おおかみたちは、うさぎをつかまえて食ってしまいました。

皇帝の財産は、若者と太陽の娘のものになりました。

あちらに疫病えきびょう　こちらに宴うたげ

あちらにもみながら　こちらに麦粉

エサラ　メサラ

あたしや水差しぶら下げて

話す人にも　聞いている人にも

あなたとわたしに幸せを

村上郁再話

資料『ロシアの民話Ⅱ』ヴィクトル・ガツァーク編／渡辺節子訳／恒文社